

神奈川県考古学会

考古かながわ 第37号

「遺跡調査発表会」から「研究成果発表会」へ

会長 寺田 兼方

初代会長の日野一郎先生は、「神奈川県考古学会」が結成されたことをとても喜ばれて、本誌第1号（1991年9月7日発行）の巻頭文で、『ここに神奈川県考古学会を設立して発表会を組織的に、永続的に運営し、調査、研究の成果を高めることに致しました。』と高らかに宣言されたが、以来「神奈川県考古学会」の主催する行事として、16回の遺跡発表会が積み重ねられてきた。

今年で通算すると第30回目の「神奈川県遺跡調査・研究発表会」を迎えたが、一方では県内の市・町村や地域単位のいわば「地方の遺跡調査発表会」が各地で積極的に開催されるようになってきたので、従来の「神奈川県遺跡調査・研究発表会」のあり方自体についても見直す必要が生じてきたように思える。

「神奈川県遺跡調査・研究発表会」という名称には、「研究」の二文字が厳然と含まれていて、単なる「遺跡調査発表」だけではなく、「研究発表会」もこの行事の中に積極的に取り込んでいこうとする姿勢を窺うことができる。この名称を考え出した先輩たちは、「遺跡調査発表」と「研究成果発表」の両立、あるいは「研究成果発表」に主体性を持たせた将来像をきつと描いていたのではないかとと思われる。まさに、先見の明がある素晴らしい着想であったと評価することができる。

先の日野一郎先生の短い巻頭文の中にも、「調査」と「研究」の二語が対等に使われており、両者が相俟って「考古学」という学問が成立することを示している。

さて、昨今の遺跡調査発表会の後で開かれる役員会や幹事会等では、「神奈川県遺跡調査・研究発表会」で扱われる発表遺跡が、先述の「地方の遺跡調査発

表会」でも発表される場合が多くなっており、発表遺跡が重複する問題が指摘されるようになってきた。確かに、興味をそそられる遺跡の報告の場合には、出土品の展示も併せて見学できるように工夫している。「地方の遺跡調査発表会」の方が、多数の参加者を集める上ではとても有利であろう。従って、地方の遺跡発表会で発表された遺跡を、神奈川県考古学会の遺跡発表会で扱っても、集客力では適わないのが現実ではないかと思われる。

そこで、地方の遺跡発表会で発表される遺跡については、過去一年間の県内の主要調査遺跡として、神奈川県考古学会でも重要性からどうしても取り上げる必要があれば、「誌上発表」という方法があるので、発表の重複を避けても、遺跡そのものの重要性を見落としているという誇りは免れることができる。

私が言いたいのは、発表遺跡の重複を避ける姿勢によって発表遺跡が減少し、そこに生じる発表時間のゆとりを「研究成果発表」に提供すれば、研究成果発表に必要となる時間が十分に確保されるであろうという事である。理想としては、「遺跡調査発表」と「研究成果発表」を、半日ずつ消化する形態を当面の目標に掲げて、直ちに検討と準備に着手し、近い将来に実現するよう願っている。

そして、やがては「遺跡調査発表会」は地方の行事となり、神奈川県考古学会の行事はより内容が高度な「研究成果発表会」が主体となる方向に進むべきであると思っている。どうしても、広く県民に報告する必要があるような重要な遺跡が発見された場合には、その「研究成果発表会」の一部を利用して、特別に報告を行えば済むことである。

「小判は出ましたか？」

渡辺 務

一頃のような事は無くなりましたが、毎年多くの発掘調査が行なわれています。少し前の資料になりますが、平成16年度は県内各所で705件の発掘調査が実施されました。ですから、街を歩く時注意していると、時々発掘調査の現場を見かける事があります。犬の散歩がてらサンダル履きで何をやっているのかと覗き込みに来る人や、学校の帰りなどに、友達同士で興味深げに立ち止まって見ている小学生など様々です。また調査によっては現地見学会を開催し、多くの地域住民の方々や、周辺地域にお住まいで、ちょうどこの考古学会の会員のようになり、考古学に興味を持たれている人々も多数おいでになります。私は調査に携わる側の人間ですから、フェンス越しに何をしていますのですかと問い掛けられる一人です。

興味深い事に、見学者の方から発せられる疑問の中に、かなりの確率で含まれる質問に、大人の方からは「何かいいものは出ますか、小判は出ますか?」、そして小学生などの子供さんからは「トイレはどこにあったのですか?」という質問があります。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

一般的に小判と呼称しているお金は、1601年初鑄の慶長小判金から始まり、1867年まで鑄造された万延小判金までを指します。つまり江戸時代に作られた金貨になります。1両は錢4,000～10,000文(時価相場)になります。

小判に対して大判もありましたが、こちらは豊臣秀吉が1588年から鑄造させた天正大判が、テレビのお宝番組で時々登場することがあります。大判の用途は主に恩賞用や贈答用として作られた特殊な金貨で、どちらかというと、いわゆる普通のお金とは別にして考えた方が良いでしょう。また、二分・一分、二朱・一朱金という長方形の小型の金貨もありました。

金貨の基本単位は両で、1両は4分、1分は4朱となります。また銀貨も使われ、金貨1両と同価値の海鼠型の

丁銀という銀貨(重さは50～60匁)や豆板銀という粒状の銀貨や、五匁銀、一分、二朱・一朱銀もありました。

銀貨の基本単位は重さの匁で、1匁は10分、1,000匁が1貫(貫目・貫匁)となります。なお、主に江戸を中心とする東日本では金貨が、北陸や大阪を中心とする西日本では銀貨が使用されていたようです。これらの金貨、銀貨は幕府の命を受けて独占的に請け負って鑄造する職人機関＝「金座」や「銀座」で鑄造されました。

蛇足になりますが、東京江戸博物館には千両箱が展示されており、直接持ち上げてその重さを実感できる展示がしてありました。もちろん千両箱は現代に作られた物で、重さは確か約30kgだったと思います。体験した私の感想は、実際泥棒が千両箱を担いで屋根の上を身軽に飛び回るの、かなり難しいだろうなと思いました。皆さんも見学されたときに挑戦してみてください。

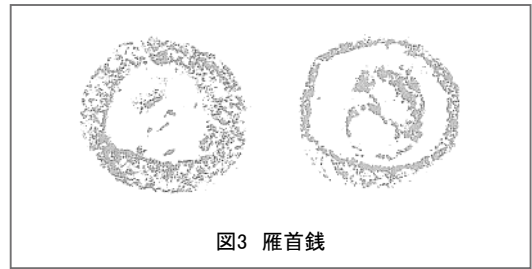
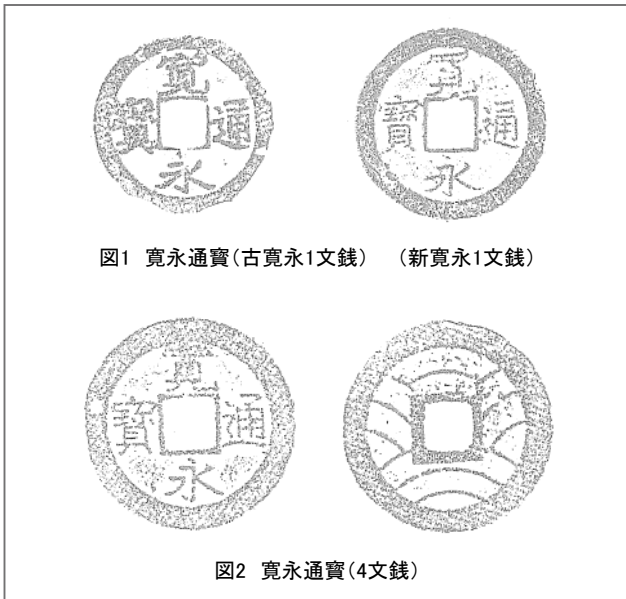
話しは戻りますが、小判は出ますかと私たちに質問する人にとっては、見学している遺跡が縄文時代であろうと奈良・平安時代であろうと、お構いなしに、遺跡イコール小判という図式がなかなか頭の中から離れないようです。

きちんと調べた訳ではありませんが、県内の遺跡調査で小判が出土した話を、私は未だに知りません。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

さて江戸時代に主に流通していたお金は、俗に1文銭と呼ばれる銅銭(一部、鉄銭もありました)で「寛永通寶」がお馴染みですね。寛永通寶は時代劇で銭形平次が投げているのと同じ形で、丸くて真中に四角い孔があいているお金です。江戸時代を通じて鑄造されていたため、時期や鑄造地によって書風・材質・形状などが微妙に異なり、1636年～1659年(寛永13年～万治2年)までのものを俗に古寛永、それ以降のものを新寛永と呼んでいます(図1)。この古寛永と新寛永の判り易い違いは、「寛」の字の12画と13画の頭が古寛永は近く、新寛永は離れます。また「寶」の貝画末尾が古寛永はスに、新寛永はハになっています。その他4文銭も造られました(図2)。

遺跡の調査では、近世のお墓の発掘で副葬品として六道銭(6枚の銅銭)がよく出土します。これは冥土の六道の巷で用いるためとも、三途の川の渡し賃などとい



われているものです。現代でも葬儀において、死者と共にお金を（模造品を含め）一緒に埋葬する習慣はまだ残っているようです。

この他、玩具として土製の模造銀貨や、雁首銭という煙管の火皿を平らに潰した模造銭なども調査で出土する事があります（図3）。雁首銭は、縹と呼ぶ約100枚の銭を、縹縄で結んでまとめる際の縹縄の固定に用いたとも、縹に混ぜたともいわれています。

なお、約100文の縹銭を「連」と呼び、10連の縹銭を「結」としています。この結が一貫文という単位になります。寛永通寶が铸造されるのは1636年（寛永13年）からですが、実はそれまでの約650年間もの長い間、日本では国家としての貨幣铸造は行なっていなかったのです。それでは寛永通寶の前に国内で铸造されたお金はというと、平安時代中頃の958年に初铸された「乾元大寶」まで遡らなければなりません。

乾元大寶は奈良・平安時代に铸造された皇朝銭といわれる「和同開珎」（初铸708年）に始まり、「乾元大寶」まで铸造された十二種の貨幣の最後にあたります。（同時期には開基勝寶という金銭と、和同開珎・大平元寶という2種の銀銭も铸造されました。）また1991年、飛鳥池遺跡から出土した「富本銭」は、7世紀後半の日本初の铸造銅銭として一躍脚光を浴びたのは記憶に新しいですが、現在これは通貨ではなく、まじない銭の一種との理解が大勢です。話題が脇にそれてしまいましたので元に戻しましょう。貨幣を铸造していな

かった間、どうしていたかという、約200年間は稲や米、布や帛といったものを貨幣の代わりに使用していたのです。皇朝銭が铸造されていた時でも、貨幣が広く日本中に流通した訳ではなく、やはり物品貨幣が主体的に使用されたと考えられます。そしてその後約450年の間、広く日本で流通した貨幣は中国や東南アジアから輸入されたお金でした。

日本では中世になって初めて貨幣を使用した流通経済が定着しますが、なんと外国のお金がそれを支えた訳です。



鎌倉時代になると、中国と盛んに貿易が行なわれるようになり青磁・白磁といった陶磁器類と共に銭が大量に輸入され、当時中国で流通した（その頃中国は宋といいました）「北宋銭」と呼ばれる各種のお金が日本に入ってきました。これに対して日本からは、日本刀などの兵具が多数中国に輸出されています。

室町時代から戦国時代には中国は明に変わっていますが、「明銭」と呼ばれる洪武通寶や永楽通寶も積極的に輸入されます。これらの渡来銭を使用した貨幣経済が国内に浸透していきました。これら渡来銭はお金としての役割の他、成分分析と铸造技術の類似点から、鎌倉大仏を铸造する際の原料となったとする説もあります。

考古学の世界では、中世後半の時期を主体に渡来銭を中心にして大量の銭が甕や壺などの陶器や、木箱や曲げ物に収められて出土する事があります。これを「備蓄銭」や「埋納銭」と呼んでいます。神奈川県下でも34例の出土が知られています。近年でも小田原市小船森遺跡（4,843枚）や（写真1）、厚木市中依知遺跡（約9,700枚）などの出土例があります。

この「備蓄銭」や「埋納銭」の県内の最も古い記録は『新編相模国風土記稿』に1835年（天保6年）現伊勢原市沼目付近から出土したという記録が見られま



船上から第2海保を臨む



煉瓦建造物の見学

確認することが出来ました。

第二海保を離れ、現在解体作業が進む第三海保を見つつ、観音崎砲台群を海上見学し、また戻る形で次の目的地である猿島に向かいました。

猿島ではまず海上から戦後米軍が接收していたとき使われていた減磁施設などを見学し、猿島上陸後昼食となりました。参加者の中には「猿島ビール」を召し上がった方もいるようですが、さぞおいしかったことでしょう。

島内では美しいフランス積みレンガのトンネルや今に残る戦跡の数々を見学、戦時中は観測所として使われていた場所にある展望台では「素晴らしい」景色が見えるというので皆さん上られていましたが、さてどんな景色をみる事が出来たのでしょうか？

その後、定期船で三笠桟橋にもどり、無事解散となりました。今回の遺跡見学会はとても内容が濃く、楽しい1日でした。

第30回『遺跡調査・研究発表会』の開催

2006年11月19日(日)、横浜市開港記念会館において第30回 神奈川県遺跡調査・研究発表会を開催しました。同会がこのたび第30回という節目を迎えたことから、寺田兼方会長に節目に寄せたご講演をいただき、会場発表3本、誌上発表7本に加え、「過去30年の調査と研究を振り返り今後を展望する」というテーマを

立てて、各時代毎・計8名の方に発表していただきました。頒布した『発表要旨』はこれまでの発表遺跡一覧も掲載された中身の濃いものとなっています。

スタッフ一同も会場の約180名の方々とともに、神奈川の考古学のこれまでとこれからに思いを馳せた会となりました。

講座『古代遺跡再発見』の開催

2006年12月3日(日)、かながわ県民センター2階ホールにおいて今年度の考古学講座『古代遺跡再発見』を開催しました。テーマは古代(7世紀末から10世紀前半頃)の遺跡—特に官衙(地方行政施設)ではないが一般集落とも考えられない—に焦点を当て、これまでに調査されたそれらの遺跡を再評価することです。

講座の構成は、井上尚明氏の特別講演「古代集落と官衙のはざま」を挟みながら、県内の主要な遺跡6件に、山梨、静岡の遺跡2件を加え、計8名の講師からそれぞれ遺跡の特徴と問題について講義していただき、最後に質疑応答と意見交換の場を設けるというかたちを

取りました。

特別講演では、行政・居住・宗教・流通・交通施設の観点から官衙をとりまく古代遺跡群に接近する方法が具体的な事例とともに紹介され、各講義でも集落内の掘立柱建物址の規格や配置の特徴、官衙遺跡との交通路などについてお話しがなされました。

今回はすでに報告された遺跡の読み解きから、古代遺跡群の動的な姿を再構築する試みの緒として、当初の目的は果たしたかと考えますが、講義や質疑応答に必ずしも十分な時間が取れず、アンケートにもその旨の指摘があったことが反省点となりました。



会場と発表者間の質疑応答風景

(^.^) 紹介！ 公開された史跡と展示会

県指定史跡 河村城跡

平成19年3月3日、山北町山北字城山の河村城址歴史公園において、河村城跡史跡整備一部完成記念式が山北町によって執り行われました。

中世山城である河村城跡は、本学会の遺跡調査・研究発表会でも第16回（1992年）、第19回（1995年）、第28回（2004年）にその調査成果が発表された遺跡です。このたび本城郭と蔵郭の間を隔てる堀切と、そこに掛かる木橋の復元整備が終了し、一般公開が開始されました。

問い合わせ先 山北町教育委員会生涯学習課
0465-75-3649



河村城跡 堀切と木橋の復元

国指定史跡 田名向原遺跡

後期旧石器時代末（約2万年前）の遺跡です。日本列島最古の住居状遺構が発見されたことで話題となり、第21回（1997年）の遺跡調査・研究発表会でも発表されています。住居状遺構では信州や伊豆、箱根、高原山産の黒曜石を用いて槍先形尖頭器やナイフ形石器等を製作しており、3千点以上もの石器等が出土しています。

田名向原遺跡は遺跡公園として整備され、史跡指定地にある住居状遺構の屋外展示（復元）や、地表から関東ローム層、関東ローム層から段丘礫層の断面展示のほか、古墳（谷原12号墳）や縄文時代の竪穴住居も復元されています。

2007年3月31日に遺跡公園としてオープンし、一般に公開されます。

問い合わせ先 相模原市教育委員会文化財保護課
042-769-8371



田名向原遺跡 旧石器時代 住居状遺構の展示

会期：2007年3月19日（月）～4月13日（金）
場所：東海大学湘南校舎3号館4階 文学部展示室
時間：9時～17時 *日祝日閉室
入場：無料（解説冊子含め）

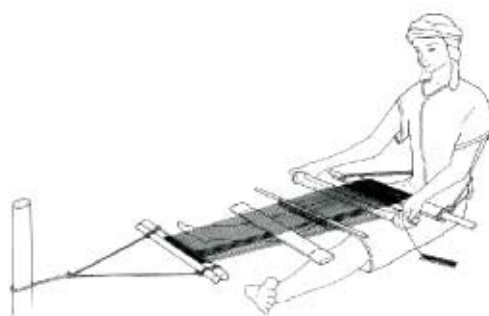
問い合わせ先 東海大学校地内遺跡調査団
0463-50-2419

展示会 第15回 足もとに眠る歴史展

『編みと織りの考古学』

編み物や布づくりに関わる考古資料を紹介しながら、「編み組む」「編む」「織る」「紡ぐ」という古代の紡織に関わる4つの技術を解説します。

復元した編み機げんしばたや原始機あんざん おりぬのを用いた編布や織布づくりが体験できます。



「財団法人 かながわ考古学財団」廃止問題 ご意見用メールアドレスの停止について

標記の問題に関わり、『考古かながわ』第36号上で設置をお知らせしたメールアドレスは、本年3月一杯にて停止いたします。

貴重なご意見をお寄せくださった方に感謝申し上げますとともに、同問題をめぐる今後の動向に引き続きご注視くださいますようお願いいたします。

なお、同問題に対する本学会の対応とその結果については、機会を改めてご報告差し上げます。

『考古論叢 神奈河』原稿の募集

『考古論叢神奈河』は皆さまで育てる会誌です。会では第16集以降の原稿を募集しております。考古学会に衝撃を与えるような論文はもちろん、研究ノートや資料紹介も歓迎します。ふるってご投稿ください。

執筆を希望される方は、2007年8月末日までに「執筆申込書」を会誌担当役員宛てにご提出ください。折り返し「執筆要項」をお送りしますので、要項にしたがってご執筆ください。原稿の締め切りは同年12月末日、刊行は2008年3月となります。

なお「執筆申込書」は、第14・15集の誌面中に掲載されています。ご不明の点は会誌担当役員あるいは下記の間い合わせ先にご連絡ください。

問い合わせ：会誌担当 滝沢晶子（株）博通
0467-25-6023

『考古かながわ』原稿の募集

連絡誌も38号（8月刊行予定）の原稿を募集中です。会主催の行事参加記や感想文、会へのご意見・ご要望に限らず、県内で開催された展示会や、聴講された講座の感想などをお寄せください。

執筆をご希望の方は、下記までお気軽にご連絡を！

問い合わせ：連絡誌担当 秋田かな子
東海大学校地内遺跡調査団内
0463-50-2419（直通）

ホームページ鋭意製作中！

現在、神奈川県考古学会のホームページを鋭意製作中です。完全公開には今しばらくのお時間が必要ですが、名称とURL、問い合わせ用メールアドレスが下記のとおり決まりましたのでお知らせします。

名称：神奈川県考古学会 考古かながわ
URL <http://www.KoukoKanagawa.net>
メールアドレス soumu@KoukoKanagawa.net

今上記のページにアクセスしても、稀に製作途中のページが見られる程度です。前述のとおりまだ試用中の段階ですが、順次整備・公開して参りますので、折に触れてご確認ください。

メールアドレスの方はすでにご利用になれます。神奈川県考古学会に関する事で、火急のお問い合わせなどがありましたらご活用ください。

なおページおよびメールの運用は、当面は連絡誌担当係が行いますが、これら管理・運用の考え方や方法についても、追ってホームページ上でご案内する予定です。

考古かながわ 第37号

発行 神奈川県考古学会
発行日 2007年3月30日
編集 秋田かな子・中川真人・渡辺 務（連絡誌担当）
印刷 （有）湘南グッド
発行者 神奈川県考古学会 会長 寺田兼方
〒251-0043
藤沢市辻堂元町4-17-4 やよい荘102
郵便振替 00240-9-71208